

決算書の学びはじめに



財務会計の イロハの **イ**

財務会計のイロハのイ

コラムまとめ Vol.3

＜キャッシュフロー計算書・決算書応用 編＞

はじめに

初心者向けシリーズ「財務会計のイロハのイ」は、財務の基礎から決算書を学びたい人や、教える立場にある人におすすめです。ワンエピソードがコンパクトな初心者向けシリーズとなっており、エピソードごとに<ポイントの整理>をしていますので、財務初心者の方でも安心して学習いただけます。

先輩社員と新入社員の2人が主人公です。先輩社員のレクチャーのもと、日々財務に関する知識を吸収する新入社員とともに財務会計の基礎を固めていきましょう。

資料は3部構成で、Vol.1には「決算書基礎編」と「貸借対照表編」、Vol.2には「損益計算書編」と「財務分析基礎編」、Vol.3には「キャッシュフロー計算書編」と「決算書応用編」を収録しています。ご自身の理解度に合わせ、ポイントを絞っての学習も効果的です。是非ご活用ください。

目次

～キャッシュフロー計算書 編～	2
#28：キャッシュフロー計算書（前編）	2
#29：キャッシュフロー計算書（中編）	4
#30：キャッシュフロー計算書（後編）	6
#31：キャッシュフロー分析とDCF法	8
～決算書応用 編～	10
#32：株主資本等変動計算書	10
#33：注記表に記載される内容とは？	12
#34：決算書はどう作られる？	14
#35：税務会計における益金と損金	16
#36：繰越欠損金と過年度修正	18
#37：よくある粉飾のパターン	20
#38：注意したい『ヒト・モノ・カネ』	22
#39：卒業試験！	24

～キャッシュフロー計算書 編～

#28 : キャッシュフロー計算書 (前編)

先輩社員 : さて、これまで貸借対照表と損益計算書、また財務分析の手法についても話してきました。今回からは、別の財務諸表についても学んでいきましょう。そのなかでも、与信管理の観点からは特に重視したい“キャッシュフロー計算書”を取り上げていきます。

新入社員 : 損益計算書だけでは、お金の動きが追えないため、キャッシュフロー計算書が必要なんですね。

先輩社員 : そうです。黒字倒産という言葉を目にしたことがあると思いますが、損益計算書上は利益がでているのに、キャッシュが足りなくなって債務の返済ができなくなってしまうケースです。なぜ、このようなことが起こるかイメージできますか？

新入社員 : 売上は計上したけど、お金になっていない…売掛金が増えて行くパターンが思い浮かびます。その売上自体が、架空の場合も想定されますよね。

先輩社員 : いいでしょう。そのようなケースにおいて、キャッシュフロー計算書を見ると、実際にはお金になっていないという事が確認できます。損益計算書の計算期間と同じように、期首から期末までを集計期間としてキャッシュフロー計算書は作成されます。

新入社員 : 貸借対照表は期末時点の財政状態をあらわすものですから、確かにB SやP Lでは抜け落ちてしまう重要な情報をキャッシュフロー計算書が補っているんですね。

先輩社員 : では、実際にキャッシュフロー計算書を見たことはありますか？

新入社員 : 上場企業の有価証券報告書で少し見たことはあります。ただ、中小企業のはあまり見た記憶がないですね。

先輩社員 : キャッシュフロー計算書自体、新しい考え方の帳票です。2000年3月以降に上場企業では作成が義務化されましたが、中小企業は任意ですからね。

新入社員 : 与信管理がより重要な中小企業こそ、キャッシュフロー計算書を確認したいですね。

先輩社員 : 資金繰り表という形で、年間の資金計画を立てるために内部的に作られることはよくありますが、外部提供のために作られることは珍しいと思います。調査会社の資料で、推定で作成されたキャッシュフロー計算書を手にするのも一案です。

新入社員：推定で作るには相当なノウハウがいりそうですね。

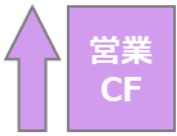
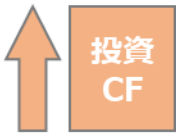

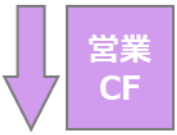


先輩社員：自分で計算するのは至難の業だと思います…。ただ、キャッシュフロー計算書の“作られ方”についてもゆくゆくお話ししますので、おおまかなイメージはつかめるかもしれません。まず今回は、キャッシュフロー計算書は、お金の動きを色分けして示している、という事を覚えておいてください。

新入社員：どこからお金が入ってきたか、また、お金の使われ方によってカテゴライズしているんですね？

先輩社員：大別すると、営業キャッシュフロー、投資キャッシュフロー、財務キャッシュフローの3つに分かれます。次回は、各々のカテゴリーを掘り下げて紹介します。また、キャッシュフロー計算書の基本的な見方、分析方法や注意したいケースを順番にレクチャーしていく予定です。

<ポイントの整理>

- ①キャッシュフロー計算書の計算期間は、期首から期末の「期間」が対象となる。
- ②キャッシュフロー計算書の作成は、上場企業のみ義務があり、非上場企業には義務づけられていない。
- ③キャッシュフロー計算書の役割とは、お金の動きを「営業キャッシュフロー」「投資キャッシュフロー」「財務キャッシュフロー」に大別し、示すことである。

	営業CF	投資CF	財務CF
+	 本業が好調	 守りの経営	 導入・成長期
-	 本業が不調	 攻めの経営	 成熟・衰退期

#29 : キャッシュフロー計算書 (中編)

先輩社員 : 今回はキャッシュフロー計算書の構造についてみていきましょう。前回、キャッシュフロー計算書はお金の流れを色分けしている、と話しましたが、どのように大別されるか覚えていますか？

新入社員 : 確か、“営業”、“投資”、“財務”に分かれるんですね。なんとなくですが、それぞれのカテゴリーのイメージができますね。

先輩社員 : 損益計算書の段階利益のような専門的な名称じゃないですし、キャッシュインはプラス、キャッシュアウトはマイナスで示されるので、確かに飲み込みやすいかもしれません。各カテゴリーを順番に確認していきましょう。まずは“営業キャッシュフロー”です。

新入社員 : その名の通り、主に商品の売上や仕入といったキャッシュの出入りに関連するカテゴリーですね？重要項目だというのはわかりますが、この項目がマイナスということは、本業でキャッシュを獲得できていない、ということで警戒したほうが良いのでしょうか？

先輩社員 : 確かにそうですが、期末のタイミングで“決算キャンペーン”など、売上が先行して計上されるなど特別の事情が絡んで、たまたまマイナスとなったケースもあります。もちろん、損益面も赤字となっておりキャッシュ獲得に苦慮しているケースもあると思いますが、単独期だけではなく、数期連続でキャッシュの傾向をチェックしたいところです。

新入社員 : なるほど！やはりキャッシュフロー計算書も、貸借対照表や損益計算書と同じように、連続期を追って状況を読み取ることが大切なんですね。

先輩社員 : 経年比較は鉄則ですので、忘れないでください。
さて、次に“投資キャッシュフロー”ですが、これもイメージできるでしょうか？

新入社員 : 投資という事は、例えば設備投資で不動産を買ったときとか、余剰資金で株といった有価証券を取得したケースが思い浮かびます。

先輩社員 : 正解です。もちろん購入だけではなく、固定資産の売却のケースはキャッシュインとなります。このカテゴリー全体でプラスとマイナスはどちらが良いと思いますか？

新入社員 : 難しいですね。これも経年比較や他の帳票を見て、個別判断する必要がありそうです。

先輩社員 : その企業が成長過程にあれば、マイナスで投資が進んでいるとみることができます。一方で、プラスのケースは、借入金の返済に迫られていて、資産を切り売りしているというケースもあるかもしれませんよ？

新入社員：その場合は“財務キャッシュフロー”と合わせてチェックですね？このカテゴリーは、借入金の増減ですよね？

先輩社員：なかなか良い着眼点です。借入金以外に、新しく株を発行して出資を受けたときも、この“財務キャッシュフロー”に計上されます。基本的には、借入金の返済が進んでいるマイナスが良いですが、プラスで特に借入が増えている時は、その目的や金額規模も確認しておくべきでしょう。どんな分析指標を参照しますか？

新入社員：私なら“有利子負債月商倍率”もあわせてチェックしますね。借入金のボリュームは、現預金残と並んで重要項目だとインプットしています！

先輩社員：基本はしっかり身についたようですね。ぜひ、いろいろなパターンを見てほしいです。もう一点、重要なキーワードとして“フリーキャッシュフロー”を紹介しておきましょう。複数の定義がありますが、今回は“営業キャッシュフロー”と“投資キャッシュフロー”を合算したものと覚えておいてください。

新入社員：主に借入金増減以外のキャッシュの動き、その合計ですよね。投資額が大きい時は、そのフリーキャッシュフローもマイナスになりそうですが、これも経年で見たとき連続でマイナスなら理由を探りたいですね。

先輩社員：その通りです。理想的なのは営業キャッシュフローで稼いだお金を、投資と借入金の返済として財務キャッシュフローに充てる構造ですが、投資額が大きいとそうもいきません。フリーキャッシュフローのマイナス要因が、そもそも営業キャッシュフローがマイナスになっていないか等も含めて、重要項目として見ておきたい項目です。

<ポイントの整理>

- ①キャッシュフロー計算書において、本業での商製品の売買等は「営業キャッシュフロー」、設備投資・株式投資は「投資キャッシュフロー」、借入金の増減・新株発行は「財務キャッシュフロー」と大きく3分類される。
- ②「営業キャッシュフロー」と「投資キャッシュフロー」を合算したものを「フリーキャッシュフロー」といい、特に連続期マイナスとなっている場合は、その要因把握とともに注視すべきである。

	営業CF	投資CF	財務CF
+	<p>本業が好調</p>	<p>守りの経営</p>	<p>導入・成長期</p>
-	<p>本業が不調</p>	<p>攻めの経営</p>	<p>成熟・衰退期</p>

#30 : キャッシュフロー計算書 (後編)

先輩社員 : さて、キャッシュフロー計算書の構造や、中身が『営業』『投資』『財務』活動に大別されていることをお話ししましたが、実際に読み解けそうでしょうか？

新入社員 : それが、有価証券報告書のキャッシュフロー計算書を数社見てみたのですが、確かにカテゴリー別に分かれていること、キャッシュの期首・期末の増減などは分かったのですが、特に営業キャッシュフローが良くわからない印象でした。

先輩社員 : 具体的に、どのようなポイントがひっかかりましたか？

新入社員 : 『投資』や『財務』については、有価証券の売買や借入金の増減などで、おおむねイメージできたのですが、営業キャッシュフローの一番上が『税引前当期純利益』スタートで、ここから混乱してしまいました。なぜ、損益計算書科目がいきなりでてくるのでしょうか？

先輩社員 : それは、上場企業のキャッシュフロー計算書の作られ方が、『間接法』によるものだからです。

新入社員 : キャッシュフロー計算書の作られ方が複数ある、つまり、それによって表示が変わってくるのでしょうか？

先輩社員 : そうなんです。営業キャッシュフロー部分は、『直接法』と『間接法』という2つの作成方法があります。簡単な図にまとめたので見てください（後述）。

新入社員 : 内訳は違いますが、営業活動によるキャッシュフローの金額自体はどちらでも同じになるのですね。

先輩社員 : はい。営業キャッシュフローの小計以下、投資区分と財務区分もどちらの計算方法でも変わりません。さて、まず『直接法』ですが、こちらは例えば『商品販売による収入』や『商品仕入による支出』といったように、営業活動に係る動きを、各々直接加減算して作成・表示する手法です。

新入社員 : 『投資』や『財務』カテゴリーと同じような感じですね。そちらの方がわかりやすそうですが、わざわざ間接法を用いるにはどのような理由があるのでしょうか？

先輩社員 : 直接法の場合、各取引の収入・支出を改めて調べてまとめ直す手間が大きいので、実務上は間接法の作成の方が簡単だと言われています。間接法は、損益計算書で計算した税引前当期純利益をスタートに据え、実際にはキャッシュアウトを伴わなかった損益計算書上の費用をプラスして戻すといったように、キャッシュに関連する項目を調整する形で加減算することで、営業キャッシュフローを導き出すことができます。損益科目も表示されていて、見慣れないと少々混乱するかもしれませんね。

新入社員：確かに先日見たキャッシュフロー計算書では減価償却費がプラスで表示されていて、なぜお金の出入りがない費用科目がプラスとして出てくるのか疑問に思いましたが、そういった理由があったんですね。

先輩社員：初心者の方は、細かく理解するのは難しいかもしれません。今日はポイントを絞って、特に営業キャッシュフローにおいては、売掛金などの営業債権と棚卸資産、また、買掛金などの営業債務の増減が重要だという事を話しておきましょう。

新入社員：それらの科目、確か『運転資金分析』に登場した営業活動に紐づく重要科目ですよね？

先輩社員：そうです。例えば、売掛金がどんどん増えて行く場合、どのような影響を企業に及ぼすでしょうか？

新入社員：売上債権回転期間の長期化で、効率性が悪化しますし、そうか、お金になっていないから営業キャッシュフロー上はマイナスになるんですね？

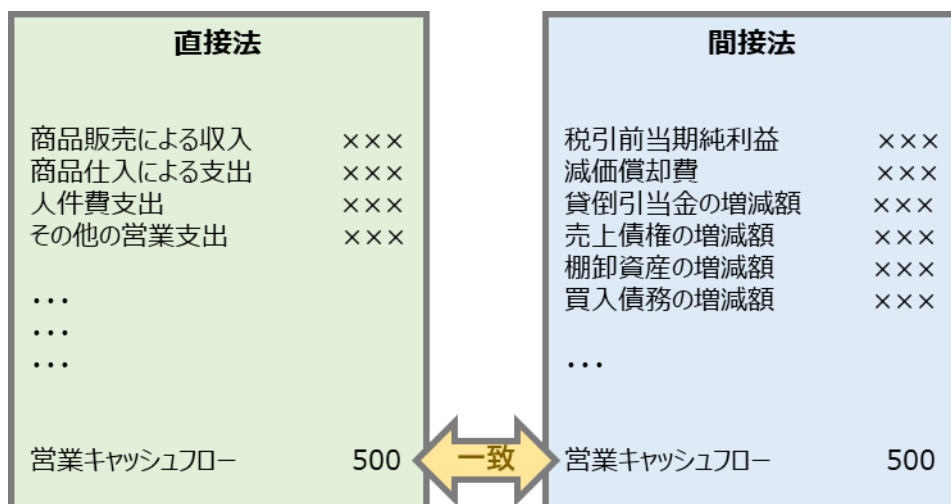
先輩社員：過去の勉強がここで生きてきましたね。その通りです。キャッシュ以外の資産の増加、例えばこの売掛金は、売上が増加して損益計算書は増収かもしれませんが、回収できなければお金は増えませんからね。棚卸資産も同様ですし、運転資金分析と合わせて営業債務の増減動向もチェックするとよいでしょう。

新入社員：損益計算書ではわからなかったお金の増減、確かにキャッシュフローを見ればわかりそうです。

先輩社員：むしろ『直接法』のキャッシュフロー計算書を見る機会の方が少ないと思いますので、より深く理解したい場合は『間接法』について調べてみるとよいでしょう。ぜひ、今後もいろいろな会社のパターンを見てみてください。

<ポイントの整理>

①キャッシュフロー計算書の作成方法には「直接法」と「間接法」があり、上場企業の有価証券報告書に公表される形式は「間接法」が一般的である。



#31 : キャッシュフロー分析とDCF法

先輩社員 : 前回まで3回にわたってキャッシュフロー計算書についてお話してきましたが、今回はキャッシュフロー計算書における財務分析についても紹介しておきたいと思います。

新入社員 : 営業キャッシュフローの『間接法』による作成方法については少し難しかったですが、キャッシュフロー計算書の構造や役割はよくわかりました。キャッシュフローにも分析指標があるのですね？

先輩社員 : 代表的なところを紹介していきます。まずは、損益計算書科目との組み合わせで算出する『キャッシュフロー・マージン』です。計算式は『営業キャッシュフロー÷売上高×100』となりますが、何を意味しているかイメージできますか？

新入社員 : 売上がきちんとキャッシュ獲得に結び付いているか、特に営業によるキャッシュインとなっているか、といった感じでしょうか？

先輩社員 : 正解です。営業活動の結果としての売上高に対し、どれくらいの営業キャッシュフローを生み出しているかを表しています。つまり、この比率が高いほど、営業活動で順調にキャッシュフローを生み出していることを示しています。

新入社員 : 営業利益はしっかり計上できているのに、キャッシュフロー・マージンが僅少というケースもありそうですね。

先輩社員 : そうですね。他の帳票との組み合わせ、また、過去期からの推移のチェックを心がけましょう。繰り返しになりますが、重要な観点です。では、次に貸借対照表科目との組み合わせで算出する『有利子負債返済能力』ですが、算式をイメージできますか？

新入社員 : 返済能力を見る分析指標は使えそうですね。分子は有利子負債、つまり借入金や社債を合算したのですが、比べる分母はどのキャッシュフローの科目を使うのでしょうか？

先輩社員 : 正解の算式は『有利子負債÷フリーキャッシュフロー』となります。つまり、フリーキャッシュフロー何年分で借入金・社債等を返済できるかを表しています。

新入社員 : フリーキャッシュフローは営業キャッシュフローと投資キャッシュフローの合計額ですね。返済能力が高くても、私なら、営業キャッシュフローと投資キャッシュフローの割合も見ておきたいですね。

先輩社員 : なかなか良い着眼点です。連続して営業キャッシュフローがマイナスで、投資キャッシュフローのプラス、つまり資産の切り売りでキャッシュを賄っている状態が続いていると、少々不安ですからね。

新入社員：そうなってくると、現預金の残高はまだ十分あるのか、というところが気になってきますね。やはり、財務諸表はそれぞれが関連しているという実感が強くなってきました。

先輩社員：もうひとつ、DCF法についても紹介しておきましょう。ディスカウント・キャッシュフロー法という考え方で、企業価値の算定や、設備投資の効果を見積もる一手法で、色々な局面で用いられる考え方です。

新入社員：横文字で難しそうですが、ディスカウントというのは『割引』という意味ですよ！

先輩社員：そうです。将来キャッシュフローを割引計算して現在価値を求める方法ですが、今回は、ごく簡単な例を挙げて考え方のみ説明しますね。例えば、100万円で設備投資をしたとき、向こう5年間で20万円ずつ稼ぐとすると、この投資効果はいかがでしょうか？

新入社員：100万円使って20万円×5で100万円稼ぐので、トントン。つまり儲かってもないし、損もしていないという結果でしょうか？

先輩社員：ここで『割引』の考え方が重要になります。今もらえる20万円と、来年もらえる20万円、さらに再来年もらえる20万円では、どんどん魅力が落ちて行っているのが感覚的にわかりますか？

新入社員：なるほど。では、その設備投資は損ですね。1年で20万円超、合計でしっかり100万円よりも多く稼いでもらわないと困りますね。

先輩社員：今はそのようなイメージをもっていればOKでしょう。より深く、会計の勉強や、企業価値測定をしようと思うと出てくる考え方になります。『DCF法』というワードと概要を覚えておいてください。

<ポイントの整理>

- ①「キャッシュフロー・マージン」は「 $\text{営業キャッシュフロー} \div \text{売上高} \times 100$ 」の算式で求められ、売上高に対し、どれくらいの営業キャッシュフローを生み出しているかを表すものである。
- ②「有利子負債返済能力」は「 $\text{有利子負債} \div \text{フリーキャッシュフロー}$ 」の算式で求められ、フリーキャッシュフロー何年分で借入金・社債等の有利負債を返済できるかを表すものである。
- ③将来キャッシュフローを見積もり、割引現在価値を求める方法をDiscount Cash Flow法（ディスカウント・キャッシュフロー法）という。

～決算書応用 編～

#32 : 株主資本等変動計算書

先輩社員 : これまで、貸借対照表、損益計算書に加えて、キャッシュフロー計算書を紹介してきました。財務諸表の本表として、もう一つ、株主資本等変動計算書を紹介しておこうと思います。

新入社員 : なんだか漢字の羅列で難しそうなイメージですが、株主資本ということは純資産に関連する帳票ですね？

先輩社員 : そうです。純資産はどのようなカテゴリーがあるか覚えていませんか？

新入社員 : 確か、大きく『株主資本』のほか、『新株予約権』と『評価・換算差額等』があるのではよ？

先輩社員 : 正解です。よく覚えていましたね。今回紹介する『株主資本等変動計算書』は、名称に『株主資本』とありますが、『等』とあるように『新株予約権』『評価・換算差額等』も記載されますので、いわば純資産の変動状況を表した帳票といったイメージを持ってもらえればOKです。

新入社員 : 変動ということは、キャッシュフローのように決算期間の動きを示すものですね？

先輩社員 : そうなります。貸借対照表はあくまでも、決算期末時点の財政状態を示すものです。純資産に動きがあった場合、前期の貸借対照表と見比べるだけでは、その変動理由がつかめないこともあります。

新入社員 : 利益か損失が出たときくらいしか、純資産が動くイメージがないのですが、変動理由を追う必要性があるのでしょうか？

先輩社員 : 確かに中小企業の決算書においては、あまり純資産は動かないもの、というイメージがあるかもしれませんが、資本金は増資や減資によって動きますし、他の剰余金も配当金の原資となっていて、減少しているかもしれません。何らかの目的で積立金を計上している場合にも、その動きを確認するときに株主資本等変動計算書は有用です。

新入社員 : そうなんですね。事業再編によって純資産が大きく変動した会社があったのを思い出しました。その時は、貸借対照表と損益計算書しかなかったので、期末時点の結果しかわからなかったですね。

先輩社員 : ある程度大きな企業になってくると、先ほどの『新株予約権』や『評価・換算差額等』が計上されるケースも増えてきますので、株主資本等変動計算書の重要性も上がってきます。また、純資産の株主資本においてマイナス計上される『自己株式』の動きを確認することもできますよ。

新入社員：自己株式という科目も確かに見かけたことがあります。自社の株を自社が持っている状態ですよね。資本金が減るようなイメージなので、マイナス計上される理由は納得です。この科目も何か注意したほうが良いのでしょうか？

先輩社員：取得した時の価格で計上されますので、一株の単価が上がっていると大きな金額が計上されることもあり、そのような場合は、取得の背景を探りたいですね。結局、自己資本比率を低下させる一因になりますので。ちなみに、以前は自己株式の取得が禁止されていました。

新入社員：なかなか、純資産科目も奥が深いんですね。気になるケースがあったら、また教えてください。

先輩社員：純資産の部だけで何冊も専門書が出ているので難しい論点がひしめいているのは確かです。そのため、初心者の方は、聞きなれない科目も多いですし、科目名だけでは内容がイメージしにくいかもしれません。ただ、貸借対照表の純資産の部を見るだけでなく、極力、株主資本等変動計算書に目を通すクセをつけることで、その決算期のフローがよりイメージしやすくなると思います。

<ポイントの整理>

- ①貸借対照表の純資産の部の、決算期間における変動状況を示す財務諸表を「株主資本等変動計算書」という。
- ②株主資本等変動計算書には、「株主資本」以外にも「新株予約権」「評価・換算差額等」といった、変動も示される。

	株主資本										評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			自己株式	株主資本合計	其他 有価証券 評価 差額金	評価・ 換算差額等 合計			
		資本 準備金	其他 資本 剰余金	資本 剰余金 合計	利益 準備金	其他利益剰余金 積立金	繰越 利益 剰余金					利益 剰余金 合計		
当期末残高	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx						xxx
当期変動額														
新株の発行	xxx	xxx		xxx				xxx						xxx
剰余金の配当					xxx	xxx		xxx						xxx
剰余金の配当に伴う 利益準備金の積み立て														
当期純利益					xxx	xxx		xxx						xxx
自己株式の処分			xxx	xxx				xxx						xxx
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）														
当期変動額合計	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx				xxx
当期末残高	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx	xxx				xxx

#33 : 注記表に記載される内容とは？

先輩社員 : さて、貸借対照表、損益計算書からはじまり、キャッシュフロー計算書と株主資本等変動計算書を確認してきました。もう一つ、忘れがちですが注記表についてもお話ししておきましょう。

新入社員 : 決算書のオマケ的なイメージで、あまり注目したことはありません…。採用している会計方針の説明が記載されていたりするんですよね？

先輩社員 : そうですね。重要な会計方針に係る事項に関する注記や、会計方針や表示方法の変更に関する注記、また、貸借対照表や損益計算書に関する注記など様々です。過去からの推移で、大きく目立つ項目があれば、関連する基準変更があるかのチェックに加え、手形取引を経常的に行っている会社では、その割引高や裏書譲渡高が注記に記載されることもあります。

新入社員 : 確か、割引というのは手形を金融機関で早期に現金化すること、また裏書は他の会社到手形を渡すケースだと思いますが、買掛金の支払い等に充てられるんですよね。こちら辺って重要なんでしょうか？

先輩社員 : その会社の資金繰りを見極めるときには特に注意が必要です。例えば、貸借対照表の受取手形は少ない一方で、割引の金額が大きければ、早期現金化のニーズが高い会社かもしれません。割引や裏書によって手放した手形であっても、不渡りになったら戻ってきますからリスクは残っていることになります。

新入社員 : そうなんですね！受取手形を含む売上債権の回転期間が少ないというだけで安心しないよう、極力注記にも目を向けるようにします。他には、見ておくべきポイントはあるのでしょうか？

先輩社員 : 減価償却累計額や資産の明細などがあれば、特に製造業など固定資産が大きい業種ではチェックしておきたいですね。貸借対照表には、取得価額と減価償却累計額を両方記載するケースもあれば、取得価額から減価償却累計額を差し引いた金額を記載するケースもありますからね。

新入社員 : なるほど。確かに、中小企業の製造業で、ほとんど固定資産が計上されていなくて疑問に思ったことがありました。詳しく調べてみると、どの機械も大切に使っていて、償却が完了していたというケースでした。

先輩社員 : 中小企業だと、注記表を確認出来ないこともあると思いますが、上場企業になると、注記のボリュームも大きくなり、その重要性も高くなってきます。他には、担保に供している資産や、係争案件の進捗状況など、決算書本表では表現しきれない内容が書かれていることもありますからね。

新入社員 : そんなに書かれていることがたくさんあると、どこまで確認すべきか悩みますね。

先輩社員：やはり、どのような視点でその企業を見るかによって、どこまで確認すべきか、つまりどれだけ時間を割くかわかるようになってくるでしょう。それができるのは、ある程度ベテランの域だと思います。ですので、初心者のうちは、時間をかけてもよいので、極力目を通すとよいと思いますよ。特に上場企業の注記は、有価証券報告書などから容易に閲覧できます。確かにわからないことも多いと思いますが、それをきっかけに学習を進めるという方法もあるでしょう。

新入社員：どんなことが書かれているのかを、まずは知るのがよさそうですね。

先輩社員：そうそう、上場企業によっては、グループ企業を含めた連結決算書と、単独決算書が作成されることがあります。学習という観点からなら、連結決算も、それはそれで論点が多いので、まずは単独の財務諸表と注記を見ていくことをお勧めします。

新入社員：おおむね財務諸表を学んできて、かなり知識がついたかと思いますが、連結決算などまだまだ勉強すべき内容がありそうですね。

先輩社員：確かに、いきなり有価証券報告書を目にしたら、難しいと感じるかもしれませんが、これまで学んできたベースの知識はこれらを読むうえで、必要なものです。貸借対照表や損益計算書の基礎知識をしっかりと復習しつつ、注記があれば、それにも目を向けるようにして、少しずつ知識の範囲を広げていってください。

<ポイントの整理>

①注記表には、重要な会計方針に係る事項に関する注記や、会計方針や表示方法の変更に関する注記、また、貸借対照表や損益計算書に関する注記等が記載される。

注記表（例）	
（令和〇年〇月〇日から 令和〇年〇月〇日まで）	
1.	重要な会計方針にかかわる事項に関する注記
	1) 重要な資産の減価償却の方法
	2) 引当金の計上基準
2.	貸借対照表に関する注記
	1) 有形固定資産の減価償却累計額
	2) 保証政務
3.	損益計算書に関する注記
	1) 関係会社との取引高
4.	株主資本等変動書に関する注記
	1) 当別配当金の増額
5.	その他の注記

#34 : 決算書はどう作られる？

先輩社員 : 財務会計の基礎知識固めとして、一つずつ順を追って説明をしてきました。ここまでで、何か確認しておきたいことや気になることはありますか？

新入社員 : できあがった決算書から見方を学ぶうちに、どのように作られるのかが気になるようになりました。決算書を作り上げるのは、主に経理の担当のお仕事でしょうか、結構大変そうですね。

先輩社員 : そうですね。簿記の世界になりますが、取引を丁寧に『仕訳（しわけ）』を起こして記帳し、積み上げて決算書を作り上げます。つまり、取引ごとに決算書のどの項目がいくら変わるのか、勘定科目と金額をメモしていくわけです。今はパソコンに記録していきますが、一昔前はノートに記帳していたわけですから、貸借を合わせるのも一苦労だったでしょうね。

新入社員 : 仕訳について、もう少し具体的に教えてください。

先輩社員 : 勘定科目は、貸借対照表の資産、負債、純資産および、損益計算書の収益、費用のいずれかに分類されます。例えば、単純に商品 100 円分を現金で売ったらどのような勘定科目に変化があると思いますか？

新入社員 : 商品が 100 減って、現金が 100 増えるということですよね。でも、商品は資産科目で期末に棚卸をするわけですから、売上 100 を計上して現金が 100 増える、であっていますか？

先輩社員 : 正解です。現金の増加は借方科目として左側に、売上は貸方科目として右側に計上すると、『現金 100 / 売上 100』と記帳できます。これが一つの仕訳というわけです。仕訳の左右、つまり貸借の金額合計は必ず一致します。

新入社員 : なるほど。この仕訳を積み上げると、貸借対照表や損益計算書といった財務諸表が作られるわけですね。決算書を見るときはあまり意識しませんが、改めて考えてみるとすごい発明ですよね。

先輩社員 : そうですね。ちなみに、このような記帳方法を複式簿記といいます。あらゆる取引を借方と貸方に分類して記録を積み重ねることにより、財務諸表を正しく作ることができるわけです。ちなみに、現金の出入りのみ記録する単式簿記という方法がありますが、お小遣い帳レベルにとどまってしまう。

新入社員 : 企業の経理担当の方は個々の取引を丁寧に拾っていかなければならないわけですが…、どのように記帳漏れを防ぐのでしょうか？

先輩社員：例えば、仕訳を入力していく時は、まずは売上帳や発行した請求書、そして仕入帳やもらった請求書をベースに打っていき、次に通帳、そしてレシートベースの小口現金の入出を打っていきます。それぞれの月末の数字に矛盾がないか、チェックしていくような流れになるでしょう。一気に一年分を入力するのは、チェックも大変でしょうから、月次試算表を作成して、最後に決算整理をして帳簿を締めるのが一般的です。

新入社員：決算整理というのは棚卸とかですか？

先輩社員：そうですね。減価償却費を計上したり、最終的な利益に対して税額を求めて計上したり、決算整理も一大イベントで大変だと聞きます。もしかしたら、将来、うちの会社の経理課に異動になるかもしれませんよ？

新入社員：ようやく自分の家計簿をつけられるようになったレベルの私では足を引っ張ってしまいそうです。

先輩社員：もし税務調査が入ったときは、その対応もしなくてはなりませんし、大きな会社になってくると、監査への協力が必要です。正しく処理がされているか、厳しい目が時に入りますからね。緊張の連続かもしれません。

新入社員：そうなんです！まずは、しっかり決算書を読めるようになりたいと思います。税務の知識も必要となると、勉強すべき範囲が広くて大変そうです。

先輩社員：では次回は、税務会計についても少し紹介したいと思います。決算書と税務は切っても切り離せない関係性がありますからね。

<ポイントの整理>

①一般企業が採用している、各取引を借方と貸方、つまり資産、負債、純資産、収益、費用に分類して仕訳し、記帳する方法を「複式簿記」という。

貸借対照表 (B/S)		損益計算書 (P/L)																																																																																											
<table border="1"> <tr> <th colspan="2">資産の部</th> <th colspan="2">負債の部</th> </tr> <tr> <td colspan="2">流動資産</td> <td colspan="2">流動負債</td> </tr> <tr> <td>当座資産</td> <td></td> <td>支払手形</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>現金・預金</td> <td>×××</td> <td>買掛金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>受取手形</td> <td>×××</td> <td>引当金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>売掛金</td> <td>×××</td> <td>前受金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>有価証券</td> <td>×××</td> <td>仮受金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>棚卸資産</td> <td></td> <td>短期借入金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>商品・製品</td> <td>×××</td> <td>固定負債</td> <td></td> </tr> <tr> <td>仕掛品</td> <td>×××</td> <td>社債</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>原材料</td> <td>×××</td> <td>長期借入金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>貯蔵品</td> <td>×××</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>固定資産</td> <td></td> <td colspan="2">純資産の部</td> </tr> <tr> <td>有形固定資産</td> <td>×××</td> <td>株主資本</td> <td></td> </tr> <tr> <td>無形固定資産</td> <td>×××</td> <td>資本金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>投資その他の資産</td> <td>×××</td> <td>資本剰余金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>利益剰余金</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td>繰延資産</td> <td>×××</td> <td>新株予約権</td> <td>×××</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>評価・換算差額等</td> <td>×××</td> </tr> </table>		資産の部		負債の部		流動資産		流動負債		当座資産		支払手形	×××	現金・預金	×××	買掛金	×××	受取手形	×××	引当金	×××	売掛金	×××	前受金	×××	有価証券	×××	仮受金	×××	棚卸資産		短期借入金	×××	商品・製品	×××	固定負債		仕掛品	×××	社債	×××	原材料	×××	長期借入金	×××	貯蔵品	×××			固定資産		純資産の部		有形固定資産	×××	株主資本		無形固定資産	×××	資本金	×××	投資その他の資産	×××	資本剰余金	×××			利益剰余金	×××	繰延資産	×××	新株予約権	×××			評価・換算差額等	×××	<table border="1"> <tr> <th colspan="2">売上高</th> </tr> <tr> <td>売上総利益 (粗利)</td> <td>売上原価</td> </tr> <tr> <td>営業利益</td> <td>販売費及び一般管理費</td> </tr> <tr> <td>経常利益</td> <td>営業外収益 営業外費用</td> </tr> <tr> <td>税引前 当期純利益</td> <td>特別利益 特別損益</td> </tr> <tr> <td>当期純利益</td> <td>法人税等</td> </tr> <tr> <td>借方</td> <td>貸方</td> </tr> </table>		売上高		売上総利益 (粗利)	売上原価	営業利益	販売費及び一般管理費	経常利益	営業外収益 営業外費用	税引前 当期純利益	特別利益 特別損益	当期純利益	法人税等	借方	貸方
資産の部		負債の部																																																																																											
流動資産		流動負債																																																																																											
当座資産		支払手形	×××																																																																																										
現金・預金	×××	買掛金	×××																																																																																										
受取手形	×××	引当金	×××																																																																																										
売掛金	×××	前受金	×××																																																																																										
有価証券	×××	仮受金	×××																																																																																										
棚卸資産		短期借入金	×××																																																																																										
商品・製品	×××	固定負債																																																																																											
仕掛品	×××	社債	×××																																																																																										
原材料	×××	長期借入金	×××																																																																																										
貯蔵品	×××																																																																																												
固定資産		純資産の部																																																																																											
有形固定資産	×××	株主資本																																																																																											
無形固定資産	×××	資本金	×××																																																																																										
投資その他の資産	×××	資本剰余金	×××																																																																																										
		利益剰余金	×××																																																																																										
繰延資産	×××	新株予約権	×××																																																																																										
		評価・換算差額等	×××																																																																																										
売上高																																																																																													
売上総利益 (粗利)	売上原価																																																																																												
営業利益	販売費及び一般管理費																																																																																												
経常利益	営業外収益 営業外費用																																																																																												
税引前 当期純利益	特別利益 特別損益																																																																																												
当期純利益	法人税等																																																																																												
借方	貸方																																																																																												

#35 : 税務会計における益金と損金

先輩社員 : 決算書の初心者向けのレクチャーは、主要なポイントを紹介し、おおむね一巡しました。学び始めたときに比べれば、知識も身につけてきたと思いますが、実感はありますか？

新入社員 : 財務諸表のそれぞれの役割と、関連性がイメージできるようになったので、当初より決算書を身近に感じるようになりました。最近是有価証券報告書を見るようにしていますが、やはり大企業の決算書は難しいという印象です。損益計算書を見て『法人税等調整額』という、法人税等を加減算している科目があり、そこそこ大きい金額が出ているケースもあって気になりました。

先輩社員 : それは『税効果会計』による会計処理ですが、簿記・会計の中でもハイレベルな論点になるでしょう。では、今回はそれを学ぶ大前提として、企業会計と税務会計の目的の違いについてお話しておきましょう。

新入社員 : 営利を目的としたすべての会社は税務申告が必要というのはわかりますが…。会計が分かれてしまうのでしょうか？

先輩社員 : まず、会社は利益に応じた納税の義務がありますので、決算書に加えて税務申告書を作成して提出しなければなりません。税務会計の目的は、公平な課税を目的にしています。一方で、経営者や投資家にとっての会計の目的は、適正な業績の測定にあります。

新入社員 : 適正な業績測定を目的として決算書を作っても、それをもとに課税するだけでは、税務会計の目的がきちんと果たせない、ということでしょうか？なかなか複雑な問題ですね。

先輩社員 : おおむねそのようなイメージですね。少々、専門用語も織り交ぜた説明になります。企業会計の世界では収益から費用を差し引いて利益を出しますが、税務会計の考え方は益金から損金を差し引いて課税すべき所得を導き出します。この収益と益金、また費用と損金はおおむね同じ科目を指しますが、目的や考え方により異なる科目が生じるわけです。

新入社員 : どのようなケースで、考え方のズレが生じるのでしょうか？

先輩社員 : 例えば、交際費が挙げられます。得意先や仕入先などの事業に関係のある相手に対する接待や贈答といったものに対する支出ですが、原則として税務上は損金として認められません。お金が余っているリッチな会社であれば、それこそたくさん交際費を支出すると税金が少なくなりますので、不公平と感ずることもあるでしょう。

新入社員 : そうなんです…。でも中小企業にとっては、人的なつながりが仕事に直結していたり、結構重要な費用の一つですね。

先輩社員：なかなか良い観点ですね。そのため、期末の資本金が1億円以下の中小企業においては、一部損金として認められるなどの一定の措置が設けられています。細かい説明は割愛しますが、このように企業規模によって税務上の扱いが異なるケースもありますので注意が必要です。

新入社員：税務の世界も奥深いですね。では、税務用に決算書をもう一つ作って、それを申告書とともに提出しているんですか？

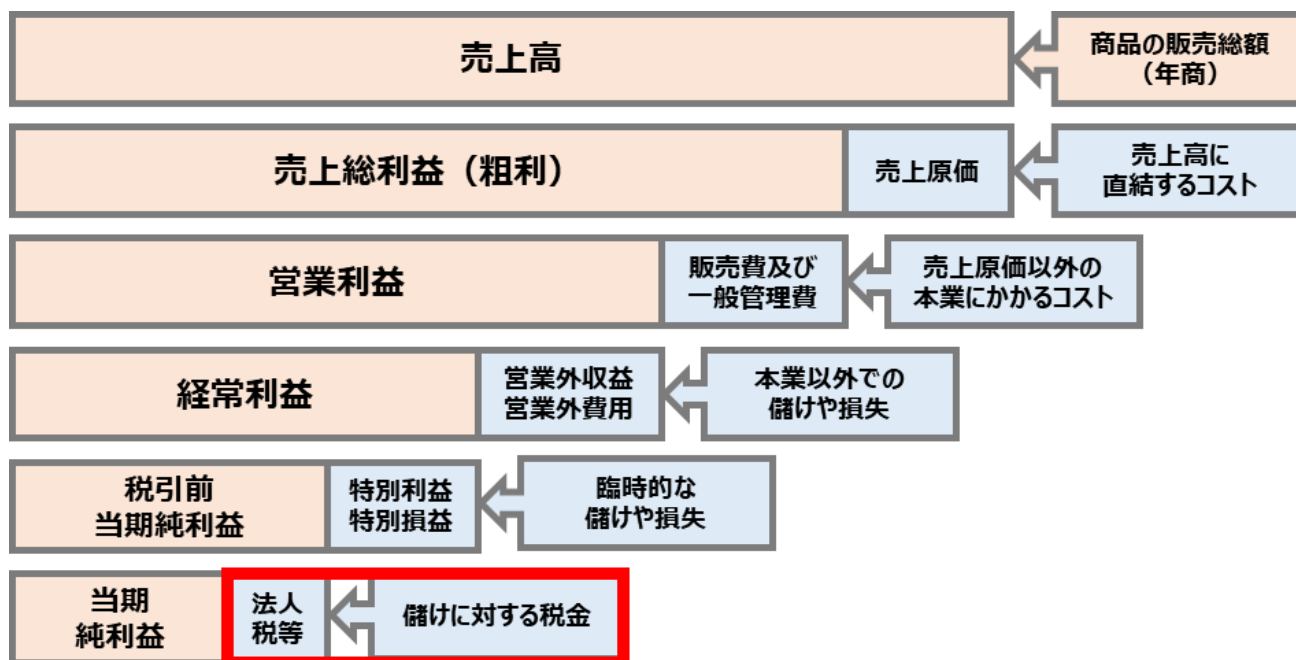
先輩社員：いいえ。企業会計目線で決算書を作成して、益金・損金とのズレを申告書の中で調整するようなイメージです。特に大きな会社になってくると、このズレも自ずと大きくなりますよね。ですから、上場企業などでは、ズレの調整を把握する『税効果会計』を適用しているんですよ。初心者のうちは、まずはこのような概要を認識しておけばよいでしょう。

新入社員：なんとなくですが、税務会計の考え方はつかめた気がします。決算書と与信の目線で見るときは、どのような点に注意すればよいでしょうか？

先輩社員：申告書自体を審査のタイミングで目にする機会はそうそうないでしょうから、正直、税務会計とのズレの把握は難しいでしょう。ですが、いくつかポイントがあるので、次回紹介しましょう。

<ポイントの整理>

①企業会計における収益と費用は、税務会計の益金と損金に相当するが、目的の違いから、一部の費用が損金に認められない等のケースが生じる。このズレは申告書において調整し、最終的な課税所得が導き出される。



#36 : 繰越欠損金と過年度修正

先輩社員 : さて、今回はあまり学ぶ機会もないでしょうし、決算書を見るうえで注意したい税務との違いなどポイントを紹介していきたいと思います。前回、少しだけ税効果会計について話が出ましたが、税効果会計を適用していない中小企業でも、決算書を見るとときに最終利益を必ず見ると思います。

新入社員 : 税引後当期純利益ですね。たまに、利益が出ているのに税金が計上されておらず、不思議に思うことがあります。

先輩社員 : 会計上の収益・費用と、税務上の益金・損金とのズレによる影響もありますが、税務上は繰越欠損金の存在によって決算表示上の税引前利益が計上されていても、法人税等がわずかというケースもありますよ。

新入社員 : 繰越欠損金というのは何でしょうか？繰越利益剰余金とは違うのでしょうか？

先輩社員 : まず、繰越利益剰余金は会計上の純資産科目で、利益の積み重ねの結果が反映されたものといえるでしょう。税務上の繰越欠損金とは、赤字となった結果生じるマイナス部分であって、今の税法ではしっかり青色申告をしていれば10年間の繰越が認められています。

新入社員 : なるほど。その欠損金額が大きく、翌期に計上された黒字と相殺してもなお残るのであれば、法人税等がかからなくなるといったことですね。

先輩社員 : そのイメージで良いでしょう。もちろん決算書上の純資産が債務超過から脱していないかといったところも合わせてチェックする必要がありますので、極力過去の経緯を把握して、どのような原因で赤字が発生したのか、今後挽回する手立てはあるのか、といった分析に繋がっていききたいですね。

新入社員 : ほかに、税務絡みで気を付けるべきポイントはあるのでしょうか？

先輩社員 : 決算書が続けてみたとき、例えば株主資本等変動計算書の期首と前期末の連続性が取れていない時があるかと思います。そのようなケースは、税務調査等を起点として決算書の過年度修正が入っている可能性もあるでしょう。

新入社員 : 税務調査というのは、税務署が厳しく決算書をチェックして、脱税を指摘するやつですよね？

先輩社員 : 税務調査と聞くとマルサの強制調査が思い浮かぶかもしれませんが、こちらはレアで、ほとんどは日程調整などを行って対応する任意調査がほとんどですよ。でも、そのなかで間違いがあって納税額が変わることがあれば、決算書を正しく直して修正申告を行わなければなりません。

新入社員：確かに、過去修正した決算書を手に入れるとは限りませんが、そこで連続性が途切れることがあるんですね。

先輩社員：上場企業であれば、修正の影響が大きければ訂正有価証券報告書でその内容を確認出来ますが、中小企業の審査のシーンでは修正された決算書を手に入れないことも多いでしょう。なかなか、調査が入って修正したことを大っぴらに言うこともないでしょうね。

新入社員：なるほど。そのようなケースは決算書を見るときはどこに注意すればよいのでしょうか？

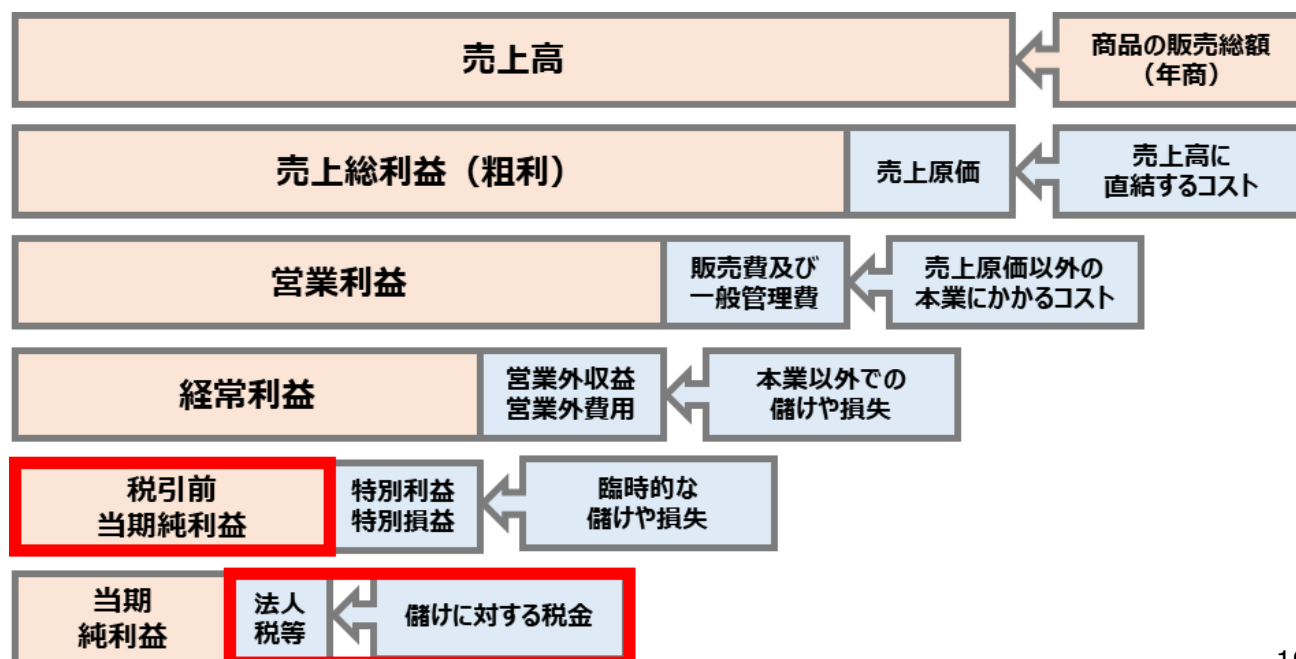
先輩社員：私は、純資産が増えたのか減ったのかをまずみます。逆粉飾だったら、修正を経て増えているかもしれませんね。そして、各資産・負債科目の前期比から、おおむね影響が生じた科目に目星をつけますが、初心者の方は少し難しいでしょう。深追いしすぎても目算が正しいとも限りませんので、最終的には現時点での財務や資金繰りの良し悪しにフォーカスすべきでしょうね。

新入社員：こういったことも、帳票間のつながりなどを知っておかないと判断が難しいかもしれませんね。

先輩社員：これまで学んだことを総動員して、様々な決算書を見ていくのが良いでしょう。その場で答え合わせができるようなものではありませんが、翌期以降のその会社の進捗を追う事で、自身の判断がおおむね正解だったのかがわかってきて、その蓄積が経験値になっていくものだと思いますよ。

<ポイントの整理>

- ①決算書上、税引前当期純利益がプラス計上されている一方で、ほとんど法人税等が計上されていない場合、税務上の繰越欠損金による相殺が生じているケースがある。
- ②決算書が過去期と連続性が取れていない場合、税務調査等を起点とする、過年度修正が行われているケースがある。



#37 : よくある粉飾のパターン

先輩社員 : 初心者向け連続講座『イロハのイ』もそろそろシリーズファイナーレです。少々難しい話もあったかと思いますが、ここまでよく付いてきてくれましたね。

新入社員 : 決算書はいくら学んでも、さらに深い論点が出てきて尻込みしそうになることもありましたが、その面白さも知ることができました。バラバラにみていたそれぞれの帳票も、つながりがあることが実感できるようになってきました。

先輩社員 : 確かに漢字と数字の羅列で苦手意識が強い人も少なくないでしょう。でもビジネスの現場では多くのシーンで求められる知識ですからね。今日は、改めて決算書を見るうえでは避けては通れない『粉飾』を取り上げたいと思います。

新入社員 : 人が作るものですから、粉飾を全くなくすのは難しいんでしょうね。これまでも、棚卸資産や売上債権が多い時は注意すべし、とお話がありましたよね。

先輩社員 : そうです。よくある粉飾のパターンとして、損益計算書で架空売上が計上すると、結局は架空の売掛金といった売上債権が貸借対照表上で増えていきます。また、原価を過少計上しようとして期末の棚卸資産を増やす手法もよくあるケースです。

新入社員 : 期末の棚卸資産を増やす理由が、レクチャーを聞き始める前はよくわかりませんでした。売上に対応する経費をしっかりと計算するために、売れていない商品や使っていない材料を原価計算上、差し引く仕組みを悪用しているんですね。

先輩社員 : その通りです。ただ、どの会社も本当は粉飾なんてしたくないはず。業績が落ち込んだことを気にして、初めはちょっとした軽い気持ちで粉飾をしてしまうのかもしれませんが、それが解消せず積み積もっていくと、決算書に異常値としてあらわれてくるわけです。

新入社員 : 異常値の判定としては、業界平均などと比べると良いんですね。

先輩社員 : できれば、そのような情報を入手してほしいですね。また、回転期間といった月商比の考え方は特に有用です。これも繰り返しの紹介にはなりますが、例えば現預金の水準が大きく月商を下回っているケースや、非常に借入金が多いケースなどは、粉飾に限らずその背景に注意すべきでしょう。

新入社員 : 他に注目すべき科目は何かありますか？

先輩社員：売上債権や棚卸資産に異常が見当たらなくても、科目振替をして誤魔化そうとするケースもあります。資産科目の中で『仮払金』や『その他の資産』といった、その勘定科目名のみでは中身がわからない科目があれば気を付けましょう。過年度からどんどん増えていけば、やはり怪しいですね。

新入社員：以前見た倒産したケースでは、『貸付金』が多額に計上されていたのを思い出しました。自社にお金がないのに、社外流出が多いのは、やはりおかしいですね？

先輩社員：グループ会社で経営している場合、関連会社間で資金を融通し合うキャッシュマネジメントシステムを導入していて『貸付金』が登場するケースもあります。そのため一概に悪いとは言えませんが、単独企業のみで判断せず、極力グループ会社の財政状態もチェックしておきたいですね。もちろん、決算書の情報だけに傾注しすぎず、グループ会社で何か悪い風評が立っていないか、といったところから定性情報収集も重要です。

新入社員：決算書の定量情報と、そこには載ってこない定性情報。両方とも大切だという事は、特に決算書の知識が付いてくると感じるどころです。

先輩社員：決算書がわかってくると、その弱点も知ることになりますからね。粉飾しそうな会社なのか、という目線も大切です。このあたりは、営業担当に違和感がないか、話を聞くことも時に効果的です。

新入社員：もしかしたら、私も将来営業部で働くことがあるかもしれません。決算書とは別に気を付けるべきポイントがあれば教えてもらえますか？

先輩社員：わかりました。次回、『ヒト・モノ・カネ』の中でも『ヒト・モノ』のチェックポイントについて紹介しましょう。

<ポイントの整理>

- ①粉飾の王道パターンとして、架空売上に対する売上債権回転期間の長期化、原価の過少計上に対する棚卸資産回転期間の長期化が挙げられる。
- ②業界平均や月商比を用いて、「現預金」水準のほか、「貸付金」「仮払金」「その他の資産」や、「有利子負債」のボリュームなど、バランスが極端に悪い科目が無いかチェックすることも重要である。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××		
固定資産		純資産の部	
有形固定資産	×××	株主資本	
無形固定資産	×××	資本金	×××
投資その他の資産	×××	資本剰余金	×××
		利益剰余金	×××
繰延資産	×××	新株予約権	×××
		評価・換算差額等	×××

#38 : 注意したい『ヒト・モノ・カネ』

先輩社員 : 財務分析の基礎編、ということでレクチャーを続けてきましたが、今回は定性情報の重要性についても話しておきたいと思います。

新入社員 : 『ヒト・モノ・カネ』の注目ポイントでしたね。この『カネ』は、主に決算書の財務分析など、定量情報という理解で良いでしょうか？

先輩社員 : 基本的にはそうですね。ただ、決算後の情報として、手形サイトの延長要請や、支払期日の延長要請、現金払いの比率が低下してくるといった動向も、『カネ』に関わる危険シグナルの例です。

新入社員 : 支払い担当がなかなかつかまらなかった、と倒産直前のケースで耳にしたことがあります。

先輩社員 : 『ヒト』に重なる部分ですが、それも一例ですね。『ヒト』については、まず社長といったトップの動向に着目です。

新入社員 : やたらと羽振りがよさそうだったりすると、私なら少し警戒しちゃうかもしれません。

先輩社員 : 公私混同が目立つ、または、数字音痴といったところにつながりそうですね。他には、出社がいつも遅かったり、そういった態度が社風に影響して、従業員の来客や電話対応が不快に感じる、といったこともチェックポイントとして挙げられるでしょう。

新入社員 : 訪問した時に整理整頓がされていなかったり、なんだか活気が感じられないという事もありますよね。従業員の退職が続いているというケースも気になります。

先輩社員 : 一方で、営業規模の割に社員が急増しているというケースも注意したいところです。それだけ人件費がかかりますので、売上がついてきているか、資金繰りは安定しているか、決算書の情報とともに確認すべきでしょう。では、『モノ』はどのような点に気を付けるべきだと思いますか？

新入社員 : そうですね…まずは、やはりその会社の主力商品の売れ行きが順調かどうか、ということでしょうか。販売先の倒産や、そうでなくても、大量の返品やトラブルの噂は見逃したくないですね。在庫状況にも気を付けたいですが、倉庫を見られるチャンスはまちまちでしょうね。

先輩社員 : 営業担当との関係性にもよりますが、決算書上、棚卸資産が大きく動いていれば、製品在庫の急増・急減と合致しているか、ヒアリングにより理由とともに把握できると理想的ですね。回答が曖昧だったり、決算と逆の状況だと、在庫管理が杜撰である可能性が考えられます。

新入社員：『モノ』については、仕入れから製造、販売までの過程をイメージするとよさそうですね。どこかでトラブルが発生していたら、供給が滞ってしまう可能性がありますよね。

先輩社員：その通りです。上流では仕入先の撤退や、高い価格での仕入れがないか、そして製造工程については、先の在庫の話がありました。納品への流れでは、納期遅れや不具合品の多発、または、製品価格のダンピングも、その背景を探りたいです。

新入社員：ダンピング、とはどのような意味ですか？

先輩社員：考えにくいほど安い価格で商品を投げ売り販売しているようなケースを指します。

新入社員：そんなことをしていたら、採算が取れないんじゃないか、と心配になりますよね。

先輩社員：様々な商製品の価格が高騰している昨今では、あまり考えにくいですが、時流と逆行する動きが目立つ場合は、やはり注意したいポイントですね。決算書は基本的に年1回、しかも我々が目にするときは、あくまでも過去データですので、それだけで判断することのリスクがわかると思います。

新入社員：決算書を学んでいくうえで、それだけではわからないことに対する理解も深まったと感じます。ですが、企業の良し悪しの判断がいかに難しいことも改めて実感するようになりました。

<ポイントの整理>

①今回取り上げた、いわゆる「危ない会社のチェックポイント」は一例にすぎません。以下のコンテンツに重要ポイントのチェックリストを一覧にまとめておりますので、併せてご確認くださいと幸いです。[こちら](#)もしくはQRコードからご覧ください。

与信管理運用の基礎
第13回：危ない会社のチェックリスト

■ 危険な企業チェックリスト

今回は、危険な企業チェックリストというものの前回の営業担当者のチェックポイントと重なる。このチェックリストは、新規取引を始める時、取引先をチェックする項目になっています。様への気付きに繋がります。気になる取引先が

■ 社長・役員

- ワンマン経営である。
- 例産歴がある。
- 内紛がある。
- 公職など経営とは関係のない肩書きが多すぎる。
- 不在のことが多い。
- 業行面で妙な噂がある。
- 家庭が円満でない。
- 仕事より優先しているものがある。
- 感傷に労働組合を構っている。
- ブレーンが機能していない。
- 社長・役員に活力がない。
- 業界での経験が不十分。
- 市場動向、コスト意識など発想に客観性がなく経営バランス感覚が不十分。
- 意思決定が遅い。
- 公私混同が目に見える。
- 従業員をけなすようなことがある。
- 意志が弱く、人が良すぎる。

■ 従業員

- 従業員が退職が目立っている。
- 経理担当者が不在がちだったり退職している。
- 従業員の社長や幹部に対する悪口が増えている。
- 中堅社員の酒を飲む機会が増えている。
- 所在不詳にしている従業員がいる。
- 接客や電話応答に身が入らない。

■ 商品・技術・サービス

- 商品構成にバランスが取れていない。
- 企画・開発力が劣っている。
- コスト競争力が劣っている。
- 商品クレームが恒常化している。
- 納期が守られていない。
- 成熟商品である。
- 在庫に感傷的な増減がある。
- 類似商品が多く出回っている。
- 荷動きに不審点がある。
- 在庫管理が適正でない。
- 特定の取引先への安売りがあがる。
- 業種・取引高に不審がある。
- ダンピング、出血受注をしている。
- 商品が季節的要因に左右されやすい。
- 過大な設備投資がある。
- 過度な安売りをしている。
- 設備投資の分だけ売上が増えている。
- 換収が甘くなっている。
- サービスがないがしろになっている。

■ 財務・資金繰り関連

- 売上高の横ばい、減少が3年以上続いている。
- 3期連続の赤字となっている。
- 売上増に疑問がある(粉飾)。
- 財務諸表に急変がある。
- 売上に占める交際費が多い。
- 金利負担の増加に疑問がある。
- 1年以内に月商の2分の1以上の焦げ付きが発生している。
- 借入金が月商の3倍以上である。
- 保証債務が目立って多い。
- 取引行との関係が悪化している。
- 取引銀行の格や数が適正ではない。
- 小口の支払いを手形で支払っている。
- 決済日が増加している。
- 仕入先からの受取手形がある。
- 手形が期中金融に流れている。
- 多重リースの疑いがある。
- 減価償却が適正ではない。
- 融通手形の増がある。
- 税金の滞納がある。
- 当座預金の出入りに不自然な増減がある。
- 売掛金の回収サイトが長期化している。
- 商工ローン、消費者金融を利用しはじめた。
- 不動産の担保権者に個人名が入っている。
- 担保権者が目まぐるしく変わっている。



#39 : 卒業試験 !

今回は二人の会話の一部を【①】といったように、敢えて伏せています。

最後に回答を示していますが、ぜひ、簡単なテストを受けるような気持ちでトライしてもらえると幸いです。

先輩社員 : 長らく財務分析基礎編のレクチャーの受講、お疲れ様でした。簡単にクイズ形式でおさらいをしようと思っています。

新入社員 : 少々緊張しますが、しっかり復習したつもりです！ よろしくお願いします。

先輩社員 : では、まずは代表的な効率性分析として、回転期間。そうですね、売上債権回転期間の求め方は、もちろんわかりますよね？

新入社員 : はい。つまり売掛金や受取手形といった売上債権を【①】で割って求めるんですね。

先輩社員 : 正解です。特に【①】比を用いた分析は、他の勘定科目のバランスを見るときにも有効だとお話ししましたよね。では、売上債権回転期間と棚卸資産回転期間の合計を受取サイクル、仕入債務回転期間を支払サイクルとしたとき、この両サイクルの差で求められるものは何だったでしょうか？

新入社員 : 『受取サイクル－支払サイクル』で、差が正の場合は【②】、負の場合は【③】でしたよね？ 資金繰り構造の良し悪しを見極める手法でしたね。

先輩社員 : そうですね。【②】が特に大きかったり、年々増加してバランスが悪くなったりしている時は、資金繰り構造が不利な状況へ悪化している可能性がありますので、注意が必要でしたよね。

新入社員 : はい。架空の売掛金や在庫があった場合も影響してきますので、この考え方はよく覚えています。

先輩社員 : では、資金繰りを見極めるための帳票として、キャッシュフロー計算書についても確認してみましょう。キャッシュの動きを色分けしている、と紹介しましたが、3つの区分は覚えていますか？

新入社員 : それもしっかり覚えています。本業によるキャッシュの出入りである【④】活動によるキャッシュフロー、固定資産や有価証券の売買等によるキャッシュの出入りである【⑤】活動によるキャッシュフロー、借入金の増加・減少等によるキャッシュの出入りである【⑥】活動によるキャッシュフローでしたよね。

先輩社員 : いいですね。では、【④】と【⑤】を合算したものを、何と呼ぶでしょうか？

新入社員：【⑦】キャッシュフローですね。連続期をチェックして、続けてマイナスになっている時などは特に注意を払いたいシグナルだと学びました。

先輩社員：キャッシュフロー計算書を見るとき的重要ポイントも覚えているようですね。では、決算書の種類として、このキャッシュフロー計算書、また決算書の根幹的な役割を担う貸借対照表と損益計算書以外に、純資産の動きを示す帳票を何と呼ぶか覚えていますか？

新入社員：はい。ちょっと漢字の羅列で覚えにくかったですが【⑧】ですね？

先輩社員：そうでしたね。ちなみに、その純資産の部の3つの区分も覚えていますか？

新入社員：まずは、純資産の部の中核で、資本金や利益の積み重ねである繰越利益剰余金を含む【⑨】と、権利行使によって約束した価格で株式を買うことができる【⑩】。また、その他有価証券の評価差額が計上されることがある【⑪】でしたよね？

先輩社員：そこまでしっかり覚えていれば、基礎的な決算書の構造、そして財務分析をするときの知識も備わっているんじゃないでしょうか。合格としましょう！基礎講座は以上になります。お疲れ様でした。最後に感想をもらえますか？

新入社員：色々とレクチャーありがとうございました。当初は苦手意識もありましたが、一歩ずつ着実に学んでいくことで、決算書や財務分析の面白さや意義が理解できました。ただ、これらはまだまだ入り口だということもわかりました。積極的に決算書を見て、自分で考え、道筋をたてることを心がけていきたいと思います。改めて、今日から新しいスタートです。

<ポイントの整理>

新入社員の会話文で伏せていた回答は以下の通りです。全問正解できましたでしょうか？

①月商 ②必要運転資金 ③余剰運転資金 ④営業 ⑤投資 ⑥財務 ⑦フリー ⑧株主資本等変動計算書
⑨株主資本 ⑩新株予約権 ⑪評価・換算差額等

コラムまとめ Vol.3 <キャッシュフロー計算書・決算書応用 編> は以上です。

財務会計のイロハのイは、帝国データバンクが運営する TDB カレッジにて掲載をしておりました。

本コラムは[こちら](#)もしくは QR コードからも閲覧できます。



TDBカレッジは「ビジネスパーソンデータのテラシーを高める」をコンセプトとし、帝国データバンクが保有するデータや世の中に公表されている各種情報を理解し、目的に応じてデータ活用する能力を高めるためのビジネスパーソン向け Web サイトです。

各種の情報源を適切に理解し、散在する情報の中から必要な情報を収集、整理・分析し、実務で活用するための生きた知識・知恵を学ぶことができます。

TDB キャッシュフロー分析統計

経営分析に欠かせないキャッシュフロー比率を掲載、ポイントも徹底解説！

「自社や取引先のリスク管理・業界平均の把握や同業他社との比較に」

- キャッシュフロー入門者から財務分析のプロまで多様なニーズに対応
- 直近 4 期分（4 月～3 月）の決算をもとに時系列で収録
- 基礎知識をわかりやすく解説した「早わかり知識編」、
経営分析に不可欠な指標を掲載した「最新データ編」の 2 冊 1 組
- 具体的事例が豊富に紹介されているので社内研修用テキストとしても◎



お申込み・サービスの詳細は[こちら](#)もしくは QR コードからもご覧いただけます。



2023 年 5 月発行
株式会社帝国データバンク

TDB カレッジ事務局

TEL : 03-5775-3210

Mail : tdb-college@mail.tdb.co.jp